これからの猪猟〈4回〉

田宮　治

七時間以上に及ぶ大追跡

この時のために溜めておいた体力と知力を目いっぱい活用し、猪の逃げ道を確実に断つようにゆっくりゆっくりと小峰を下りた。止め現場がちょうど右下になるようにGPSで最後の確認をして進路を定め、無線のボリュームを最小にしてGPSをポケットにしまいこんだ。

マロ号のいつもの堂々たるワン、ワン、ワン、ワン、ワン、ワンときっちり区切った素晴らしい止め鳴きが真下五〇㍍くらいの大谷の下から次々と沸き上がり、山々に谺している。何時間も猪を止めているにもかかわらず、自信に満ちた鳴き声である。そして「ジジ、ここだよ。早く来いよ」と呼び続けている。

止め現場に行くには小峰伝いを下りるよりほかにない。右も左も雑木の大木がまばらにある険しい崖になっているが、見通しは非常にいいので、その気になれば谷越しでも三〇〇㍍くらいは簡単に行ける。

改めてライフルを確認する。いつ飛び出して来ても撃ち込める態勢で一歩また一歩と足場を確認しながら慎重に寄り付く。もうすぐ止め現場の真下になるが、小峰はここから崖になっており、下りるどころか岩がハングして見下ろすことさえできない。谷底まで三〇〇㍍くらいの所で一度立ち止まり、辺りの様子を見ると、やはり崖下はいつもの狩り道のある難所だ。

この大谷を下の中部林道から沢伝いに上るのは、途中に堰堤が二カ所もあるので大変である。そこで、私は山の中腹にある小道に乗って下まで狩ってから上ろうとしたが、ちょうど小道が崖下で終わっていたのである。右上方から唐松林を下りるしかないが、そうすると猪は必ず下に飛ぶはずである。

小峰側は日当たりの良い平なので山全体に雪はない。大木の根元でつい残雪を踏んでしまい、雪玉が二、三個、止め現場まで転げ落ちた。「しまった」と息をのみ、銃を握って右左を見張ったが、マロ号の鳴き声は何事もなかったのでほっとした。

すると、何とマロ号が左下の逃げ道を遮ってひょっこり顔を出し、私のほうを見上げ、「ジジ、やっと来たな」と安心したようにまた猪の所にすっ飛んで行った。その瞬間、すぐ真下からドドドッー、バリバリッと凄い音がした。マロ号はその音を追いかけるように突っ走って行った。

一瞬だけマロ号の姿は見えたが猪は全く見えない。大沢伝いに上へどんどん上っているようだ。まるで寝屋から飛び出して来たばかりの猪のように一本の小峰伝いを一気に並んで上っている。また大峰筋のバイパスに乗って逃げ切るつもりらしいが、マロ号もそうはさせじと得意のチョンガケ（逃げ上る猪の後ろ足にギャッギャッと噛みつく猪止めの一流芸）を繰り出している。

「しまった！　あと少しだったのに。私としたことが……」「こうなったらマロ号を信じてどこまでも追って、絶対に仕留めてやる！」「頑張ってくれよ、マロ」と心で念じながら気合を入れてまた走り出した。

やっと大沢が二つに分かれてい

る所に差しかかった。右の沢は大峰筋のすぐ下まで続いているが、急な岩場で上れない。左の沢は上の登山道まで上れる良い沢だが、いつも猪が寝ている所でもある。

今日の猪はその真ん中にある大尾根を上って、上で繋がっている大峰筋に向かっている。この大尾根に向かって逃げることなど考えられないことだ。これまで何度も大尾根を上から狩り下りている猟場であるが、わが犬舎の一軍犬たちに追われ、上に向かって逃げたことは今まで一度もない。まして猪止め軍団の中でも群を抜くマロ号を相手にして、この逃げっぷりは全くもって考えられない。

大尾根を目の前にして、改めて作戦を考えながら時計を見ると既に十一時五十分である。朝七時四十分に出猟してもう四時間以上も攻め続けているが、猪の勢いは全く衰えず、大山の上へ上へと逃げている。雪山における猪猟の常識まで塗り替えるような恐ろしいまでの大一番になっている。

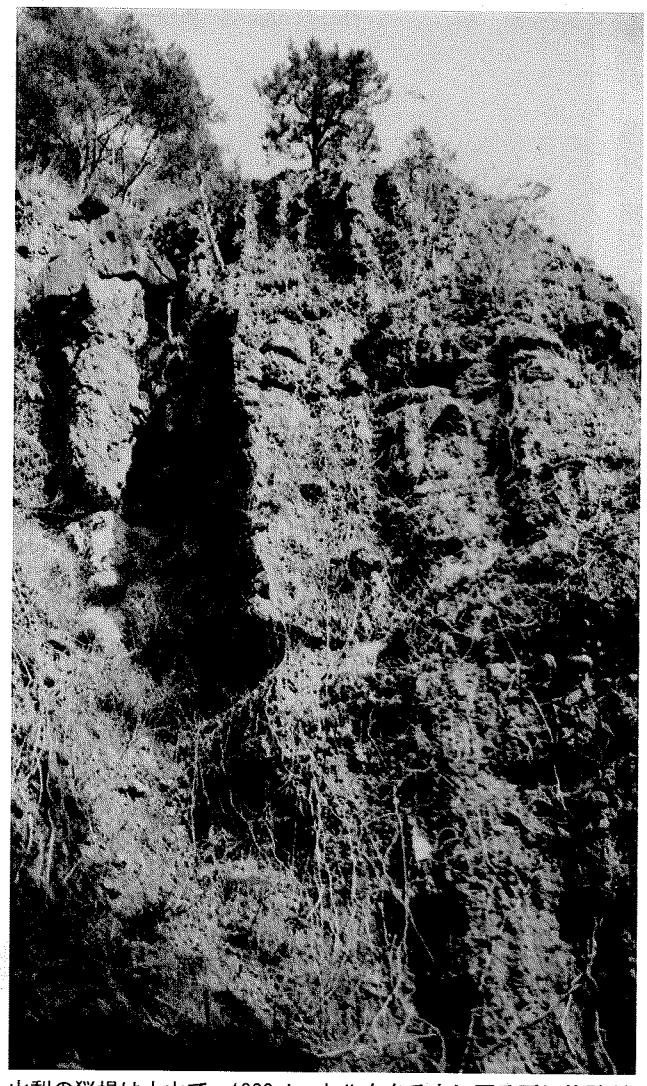
私が押し進めようとしている猪猟は、まさにこの限界に立ち向かって成長していく極致である。さらなる極致の猪猟で未来に繋げるためには、何度も限界に挑戦し続け、この目の前の激戦に必ず勝つことなのである。

「何くそ！　これしきのことで負けてたまるか」と気合を入れ、目の前の急斜面を上った。その時である。マロ号の元気な止め鳴きが聞こえてきた。GPSで確認すると、この尾根の中間辺りで、ここから三〇〇㍍くらいの所にいる。

大尾根は沢の前から一〇〇㍍くらいが大杉林の急斜面になっており、その斜面を上り切ると、雑木林のなだらかな見通し良い広い尾根が三〇〇㍍ほど続いている。その先にはまた大杉林の急斜面が一〇〇㍍くらい続き、上り切ると例の大峰筋に交っている。

マロ号はなだらかな尾根筋で、猪と一〇㍍以上離れて立ち木か大岩を挟んで対決している。その鳴き声は寝屋止めの時によく鳴く素晴らしい寄せ鳴きである。ワン、ワン、ワンと、山々に響き渡る堂々とした区切りの良い鳴き声である。

マロ号の猪止め芸は超一流であり、その最高の射竦め芸をもって猪を止め切り、鳴き通して友犬のヨシ号とシロ号を呼び寄せているのである。グレ猪もマロ号の実力を認めたようで、攻撃音は全くない。



山梨の猟場は大山で、1000メートルもある上に至る所に絶壁があるので命がけである。しかし、目に見えるこれしきの困難など乗り越えて当たり前

マロ号は「こら！　逃げ出したら噛みつくぞ」と、射竦めをかけて睨み合っている。「よしよし、マロ頑張れ！　今行くからな」と急斜面をよじ上り、なだらかな見通しの良い広い尾根筋をゆっくりゆっくりと注意しながら進んで行く。すると、マロ号の元気な姿が飛び込んで来た。五〇㍍くらい先である。

その場にしゃがみ込み、いつでも撃てる態勢でじっと待つが、猪の姿は見えない。マロ号の一〇㍍くらい先に大岩があり、そこへ向かって吠えている。その先は見えないが、多分、猪が大岩を楯に陣取っているようだ。今日はライフルなので十分な射程距離はあるが、見えないのでは仕方がない。

一歩また一歩と、いつでも撃てる態勢で丸見えの中を慎重に寄り付くが、大岩の陰が凹地になっているのでどうしても猪の姿が見えない。マロ号は既に私の接近に気付き、私に撃たせようと躍起に動き回って、大きく左右にラウンドをかけて猪を誘き出しているが、猪は全く動かない。

一気に飛び出して撃ち獲りたいのだが、まだ六〇㍍くらい先なので迂闊には近寄れない。

その時だ。マロ号が凄い唸り声で猪に襲いかかった。ほんの一瞬、ワンワン、グォーックォーッと絡み合いになるが、私がぶっ飛んで行った時には既に遅く、猪は岩陰から大杉林の急斜面をどんどんと上っている。マロ号も負けずに急追し、チョンガケを連発している。マロ号は限界どころかますます元気である。この調子だと上にある舗装道までに止め切るずだ。

私はマロ号が道に出て来るのではないかと心配していたので、松土さんに現況を報告して上の道にタツを張るようにお願いした。

ところが、松土さんのグループも鹿にタツを切られ、甲府方面の山にタツを張り替えている最中だったようで、今は一人も出せないとのことである。

このような状況は覚悟の上だった。十対一、つまり松土さんのグループと私一人が勝負する覚悟で単独猟を楽しんでいるのだから仕方がない。こうなればマロ号だけが頼りだ。

私の単独猟は、困った時の犬頼みであり、いつもそばに超一流のマロ号が付いている。マロ号でなければ絶対に勝負を貫徹できない。「俺流の猪猟をやり抜き完勝してみせるぞ！」と歯を食いしばりマロ号を追って行った。

また、私のすぐ上でマロ号の止め鳴きである。「ジジ、大丈夫だよ。絶対に逃がさないからな」と元気で呼んでいるような堂々とした止め鳴きである。何と今度は二〇〇㍍も猪を走らせずに、大峰筋で止め切って勝負している。

その現場はいつも狩り下りる、上の道から三〇㍍くらい下の所である。道からよく見える場所なので、もし誰かが駆けつけてくれたら、猛猪でも簡単に撃ち獲れるはずである。しかし、私が見せたい究極の猪猟とは、目の前に広がる急斜面や丸見えの大峰筋であっても、一人で乗り越えてマロ号とともに勝ち鬨を上げたいのである。

「待っていろ！　すぐ行くからな」と、やっとのことで大峰筋に立った。ここで気になっていたヨシ号とシロ号の居場所をGPSでまず確認した。

ヨシ号とシロ号の頑張りに涙する

大峰筋からは猪を止めた第一止め現場（小屋の沢）やマロ号の第二止め現場（堰堤の沢）もはっきり見えている。快晴だったので、下に広がる集落から遥か大菩薩の山並みまで望める。まるで一枚の美しい山岳絵のようである。見慣れた景色でも格別である。そんな中で、やはり目で追いたいのが、ヨシ号とシロ号の猪を追っている行動軌跡である。

ヨシ号とシロ号は、マロ号と分かれて猪を止めた第二現場の赤芝沢の堰堤から大沢伝いに大峰筋のすぐ下二〇〇㍍くらいの所まで猪を追いまくり、大峰の弛みを越えてマロ号の第四止め現場の尾根を目指して追い上げて来たようだ。やはりヨシ号たちは私とマロ号を意識して、こんな所まで猪を追い込んで来ていたのだ。

マロ号が第四止め現場で、寝屋止めでもないのに素晴らしい寄せ

鳴きだったのは、友犬のヨシ号とシロ号がここまで登って来たことを感知して呼び続けていたのである。

ヨシ号たちに追われた猪は、大峰を越えてマロ号が追っている猪と合流しようとしたが、マロ号の見事な寄せ鳴きで急転して、再び元の小屋の沢に戻って来た。まだまだ元気で戦い続けている。残念で仕方がないが、止め現場が動いているということは、猪はマロ号同様ケガもなく、まだ元気な証拠である。

いつの間にかマロ号もヨシ号も、そしてシロ号も、こんな究極の戦いができるようになっていた。どこの猟場であろうと、私の前を走り、どんな猪でも止め切って最高のチャンスを作ってくれる。そして、猪猟の極致まで導いてくれる。

一刻を争う大事な時だから小休止などは論外だと思うが、実はこれからという時の対策こそ重要になってくる。すぐに駆けつけたい気持ちを抑えて、これからの持久戦に備えて勝ちに繋げるために、走り続けてきた体を休めるのは当たり前のことである。ユンケルを飲んで、おにぎりを頬張り、水をガブ飲みして鋭気を養う。

マロ号は落ち着いたもので、いつもの射竦め鳴きで、「早く来いよ、ジジ」と呼び続けている。この間も止め現場は少しずつ上に動いており、道路下ぎりぎりの所できっちりと止まっている。

この場所は願ってもない最高の止め現場であり、猪が上に逃げようとしても道路側面は高いコンクリートの壁で上れない。私はここが決め場所と思い、「さあ、行くぞ！」と気合を入れ直し、雪の残る大峰筋をいつでも撃てる態勢で慎重に寄り付いた。

ところが、肝心な止め現場は道下三〇㍍の大峰筋の左側に広がる檜の植林地で、二、三㍍の苗木全体を黒い鹿除けネットがすっぽりと覆っているので、山肌が黒い上に茅や草木まで一面に茂り、猪の姿は全く見えない。

私は少し粗雑な寄り付きになっていたことに気づき、道路の高い壁の下でウロウロしている猪を想定し、逃げ下りて来る猪を迎え撃つことだけを考え、その場に立ち止まって様子を見ていた。すると、猪が丸見えの私に気づいたようで、ドドドーッと草木を揺らしながら突っ走った。

「よし、来い！」と身構えたが、猪はそのまま草木の中を上に向かい、大峰筋に道路から上り下りする五〇㌢くらいの出入り口の段差を見事にすり抜け、何と道路を上に向かって突っ走ったのである。

私は猪の逃走術のあまりの見事さに唖然とした。ここが限界の決めどころと意気込んで望んだ止め現場でありながら、マロ号の追い鳴きに傾注してしまい、猪を撃ち獲るどころか姿も見られず、ものの見事に逃がしてしまったのだ。

残念だとか無念を通り越した自分への不甲斐ない気持ちはあるが、それを言ったところで仕方がない。それよりこの先の対策を考え、あくまでも想定外の限界に挑戦することである。（つづく）

若犬は撃って噛ませるのが何よりの良薬だ。チャンスを断じて逃さぬことである。逃してばかりでは若犬は追い犬になってしまう